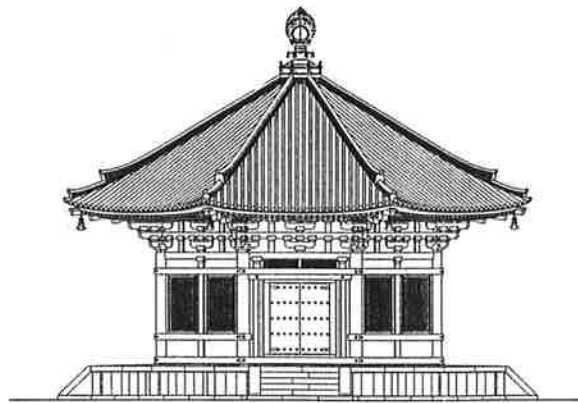


日本イコモス国内委員会

JAPAN ICOMOS INFORMATION

第4期 第7号 1999年8月16日 発行



目 次

メキシコ総会における国際シンポジウム	石井 昭	1
1999年次第2回理事会（拡大理事会）報告	宗田好史・他	2
研究会「近現代建築の保存について考える－2」報告	田原幸夫	6
世界遺産としてのブラジリア	南条洋雄	8
CULTURAL ITINERARY 国際専門委員会参加報告	杉尾邦江	12
パガン遺跡（ミャンマー）の保存	西村幸夫	15
ICOMOS STRATEGIC PLAN 1999-2002 (FINAL DRAFT)	COMMITTEE	20
事務局日誌（1999/6/1～7/31）	事務局	27
お知らせ－8件	伊藤延男・山田幸正・他	28

JAPANESE NATIONAL COMMITTEE

ICOMOS

INTERNATIONAL COUNCIL ON MONUMENTS AND SITES/国際記念物遺跡会議

表紙 : 興福寺北円堂
COVER : Kofukuji Hokuendo

メキシコ総会における国際シンポジウム

石 井 昭

来る10月17日（日曜）から23日（土曜）までの1週間にわたりメキシコ国内で開催される第12回 ICOMOS 総会 -GENERAL ASSEMBLY AND INTERNATIONAL SYMPOSIUM- は、そのプログラムがいささか複雑で難解です。初日の「総会第1部」がメキシコシティ、第6・7両日の「シンポジウム総括セッション」および「総会第2部」がグアダラハラ、といった具合に主会場が遠距離を移動するだけではありません。第2～5日の「シンポジウム部門別セッション」が、それらにグアナファトとモレリアを加えた4都市に分散し、並列的に催される点には、特にご注意くださいと思います。会員の皆様の便宜のために、紙面の許す範囲で、プログラムの要点を記しておきましょう

開会式・総会第1部

MEXICO CITY 会場 PALACIO DE BELLAS ARTES 日時 10/17 09:00～19:00

シンポジウム 基本テーマ <THE WISE USE OF HERITAGE>

MEXICO CITY

会場 PALACIO DE MINERIA
部会テーマ <HERITAGE AND CONSERVATION>
専門委員会 ① ARCHAEOLOGICAL HERITAGE MANAGEMENT, ② UNDERWATER CULTURAL HERITAGE, ③ ANALYSIS AND RESTORATION OF STRUCTURES, ④ RISK PREPAREDNESS
開始～終了 10/18 10:00 ～ 10/20 19:30

GUANAJUATO

会場 CENTRO DE CONVENCIONES
部会テーマ <HERITAGE AND SOCIETY>
専門委員会 ① ECONOMY OF CONSERVATION, ② TRAINING, ③ LEGAL ISSUES, ④ INDUSTRIAL HERITAGE(*), ⑤ CULTURAL ROUTES
開始～終了 10/18 17:00 ～ 10/21 13:00

MORELIA

会場 CASA DE LA CULTURA
部会テーマ <HERITAGE AND TERRITORY>
専門委員会 ① HISTORIC TOWNS AND VILLAGES, ② VERNACULAR ARCHITECTURE, ③ WOOD, ④ EARTHEN STRUCTURES, ⑤ STONE
開始～終了 10/18 20:00 ～ 10/21 13:00

GUADALAJARA

会場 HOSPICIO CABANÁS
部会テーマ <HERITAGE AND DEVELOPMENT>
専門委員会 ① WALL PAINTING, ② CULTURAL TOURISM, ③ HISTORIC GARDENS AND SITES, ④ PHOTOGRAMMETRY, ⑤ 20TH CENTURY ARCHITECTURE(*)
開始～終了 10/19 09:00 ～ 10/21 13:00

都市間移動バス 10/18 09:00 - MEXICO CITY 発 他の3都市まで所要4～6時間
10/21 - 夕刻 GUADALAJARA 着 他の3都市から所要3～6時間

シンポジウム（総括）・総会第2部・閉会式

GUADALAJARA 会場 HOSPICIO CABANÁS 日時 10/22 09:00 ～ 10/23 19:00

参加をご希望の方は、申込期限（9月22日）が迫っておりますので、手続きをお急ぎ下さい。事務局にご一報いただければ、メキシコ・イコモス内の総会組織委員会から届いた最新版の案内パンフレット（申込用紙添付）を直ちにお送りします。

1999 年次第 2 回理事会（拡大理事会）報告

1999 年次第 2 回理事会（拡大理事会）が、去る 6 月 12 日（土曜日）午後 1 時より 4 時 30 分まで東京・神田の学士会館で開催された。出席者は、委員長：石井 昭、理事：稲葉信子、上野邦一、藤本 強、前野まさる、宮本長二郎、宗田好史、山田幸正、顧問：伊藤延男、坪井清足、本部執行委員：西村幸夫、小委員会主査：益田兼房、事務局員：吾妻綾子（陪席）の各氏、議事内容は以下の通りであった。

〔報告事項〕

1) National Committee 現況調査への回答

1998 年次 ICOMOS Advisory Committee（ストックホルム）で決定された国内委員会（世界 98 カ国）現況調査は、本年 10 月、メキシコでの ICOMOS 総会において総括される予定である。日本国内委員会に関する調査書は、石井委員長が 5 月末に記入を終えて提出した旨、報告された。調査書には、会員の専門分野別人数を記入する欄があり、多岐に渡る専門分野が列挙されていたが、分類方法そのものに疑問があり、また当方の会員情報も不十分なため、委員長判断で、archaeologist 34 名、architect 50 名、planner 19 名などと適当に記した旨が述べられた。事務局には、比較的新しい入会者の略歴書は保管されているが、それ以外の資料はない。会員各氏の専門分野についてできるだけ詳細に把握することが、今後の課題として委員長より提起され、これを確認した。

2) Directory of ICOMOS Members のための原稿提出

同じく 1998 年次 ICOMOS Advisory Committee の決定にもとづき、イコモス会長 Roland SILVA 氏の主導により進行中の標記 Directory（会員名鑑）については、前回理事会で石井委員長が個人調査票記入用紙を作成し、郵送・回収の上、一括して提出する事とされた。その結果について、委員長より報告があった。個人調査票は 3 月末締切で回収を行ったが、4 月 10 日の時点で、約 3 分の 1 の会員から回答を得たのみである。回答のない会員については、氏名と生年月日、及びメーリング・アドレスのみを記載して、全会員 158 名分を揃え、同 17 日に SILVA 会長に送付した。なお、Advisory Committee において、会員の個人情報については、慎重な取り扱いを求める少数意見もあったことから、今回の調査では、回答のない会員に対して特に督促をしなかった旨が、委員長から報告された。

3) HUNGARY/ICOMOS 主催の夏期講座への講師派遣

石井委員長より、前回理事会で了承した標記要請について説明があり、杉尾邦江氏に依頼し、承諾を得て、3 月末に HUNGARY/ICOMOS の Andras ROMAN 教授へ回答したと報告があった。今年度の同講座は 6 月 29 日から 7 月 6 日までエゲルで開催され、庭園、自然環境、公園、文化景観等をテーマとしており、杉尾氏の講演の内容は日本庭園についてである。

4) US/ICOMOS Intern Program 1999 への参加者内定

前野理事より、すでに前回理事会で報告されたように、選考委員会（前野まさる、稲葉信子、渡辺保弘各理事）により、標記プログラムへの参加希望者 2 名を選び、応募書類一式を米国イコモスに郵送したが、4 月末、米国側による採否決定が兩人に通知された旨、報告された。採用は 1 名で、東海大学大学院生の片野朋治君が招聘され、すでに米国に出発した。

5) 憲章等研究報告書の出版

第一小委員会（文化財保護関連憲章等研究班）益田主査から、「海外文化遺産保護憲章研究報告書」が配布され、これまでの小委員会の活動と会計報告がされた。なお、同委員会は今後も同じ態勢で研究活動を続ける旨が述べられ、これを了承した。

6) 研究会「近・現代建築の保存について考える」

担当の田原幸夫理事（当日欠席）より、6月5日に開催された標記研究会についての報告が書面で提出され、委員長より補足説明があった。また同研究会に出席した前野理事から、講演と討論の内容、特に保存・活用の経済効果の捉え方についての議論や、世界文化遺産ブラジリアの特質についての議論が紹介された。この研究会は今後も継続される予定である。

ーその他

JAPAN ICOMOS INFORMATION 第4期第6号が、6月9日付で発行され、郵送準備中であることが、委員長及び事務局から報告され、拡大理事会でも配布された。

[審議事項]

1) 新規入会者および退会者の承認

下記1名の入会と3名の退会について、石井委員長並びに山田理事から説明があり、審議の結果、以下の内容を承認した（敬称略）。

（入会者）	（現職）	（推薦者）
磯野哲郎	（株）パデコ シニア・アーキテクト	岡田保良・山田幸正

（退会者）	（事由）
岡田英男	重病（2月17日付け書面により家族から申出）
田中 琢	本人希望（3月20日付け書面により本人から申出）
森 宣勝	逝去（3月29日付け書面により遺族から申出）

2) 新規入会者の勧誘方針(継続)

前回の審議を踏まえて、石井委員長より下記の2項が提案され、審議の結果、理事会（拡大理事会）の基本方針としてこれを採択した。

(1)新規入会者の勧誘・推薦にあたっては、ICOMOS 本来の国際的諸活動を重視し、これまで手薄であった専門分野・職業分野に属する意欲的な人材を優先するように努める。

(2)現理事会(拡大理事会)の任期内の目標として、本年15名程度、明年15名程度の新規入会者を期待する。

また、上記に関する審議の中で、次回拡大理事会（9月11日）までに、特に手薄な分野から10人程度の新規会員を推薦するべく、具体的に候補者についても検討した。

3) 国際専門分科委員会への参加者の増員方針(継続)

昨年12月の日本イコモス総会において国際専門分科委員会への今後の対応方針について協議した結果、各専門委ごとに複数の委員を選任することによって、国際的活動をいっそう活発化するとともに、Voting Member の負担軽減、委員交代の円滑化を図ることが望ましい旨、決議された。これを受

けて拡大理事会では継続審議を重ね、早期増員が望まれる下記3種の専門委について人選を進めた。

(1)Vernacular Architecture (現委員・大河直躬氏) : 候補適任者としてイコモス会員でない2氏の名が挙がった。入会勧誘を含め両氏との折衝を岡田理事・稲葉理事に委ねることとし、結論を保留した。(2)Cultural Tourism (現委員・石井 昭氏) : 宗田好史氏(京都府立大)を Associate Member に選任した。明年中に Voting Member を交代する。(3)Historic Towns and Villages (現委員・上野邦一氏) : 福川裕一氏(千葉大)を Associate Member に選任すべく、石井委員長が折衝することとした。承諾が得られれば、明年中に Voting Member を交代する。

一方、日本イコモスから参加者をまだ選任していない専門委についても、例えば Wall Painting、Stone、Risk Preparedness 等の専門委を念頭に置きつつ、次回以降、対応を検討することとした。

4) 当面の事業計画

一研究会・講演会・懇親会・他

研究会としては、DOCOMOMO 日本支部及び JIA との共催で、近・現代建築の保存に関する第3回研究会が11月以降に予定されている旨、田原理事(当日欠席)に代って石井委員長より報告され、これを了承した。

また、委員長より、世界遺産への関心が近年著しく高まり、UNESCO に対する Advisory Body としての ICOMOS の役割がますます重要になっている事実にかんがみ、日本イコモスとしても、(1)理事会のもとに世界遺産関連問題研究班(第4小委員会)を設けてはどうか、(2)今年次総会(12月11日)の折に世界遺産条約に関する公開講演会ないし研究会を催してはどうか、との提言があり、次回にあらためて審議することとした。

一文化財保護関連憲章等研究班(第1小委員会)

益田主査から今後の活動として、同氏並びに稲垣顧問を中心として、日本の木造建築に関する保存のプリンシプルを成文化する作業を続けること、また町並み保存連盟の憲章作成に協力することが提起され、両者とも了承した。

一出版協力・文化講座協力・他(第2小委員会)

近畿日本ツーリスト出版部刊「世界遺産を旅する」第10及び11巻が刊行され、最後の第12巻もまもなく監修が終了するとの報告が、羽生主査(当日欠席)に代って石井委員長からなされた。また、同委員長から東京都江東区主催の連続講座について渡辺勝彦・石井 昭・岡田保良・山田幸正の4氏を講師として進行中である旨が報告された。これらの活動(有志担当)は日本イコモスの会費外収入源でもあるので、今後とも積極的に対応するべきことが確認された。

5) International Experts Meeting(Hue, Vietnam)への代表派遣

ヴェトナム政府の要請にもとづき、ユネスコ世界遺産センター主催で、フエ(世界遺産)の保存問題に関し、今年9月、現地において、下記の二つの国際会議が開かれる。

- ① International Experts Meeting (3-4 September)
- ② International Donors Information Meeting (5-6 September)

①に出席する ICOMOS Representative を日本イコモス会員から選んで欲しい旨の依頼状が、5月10日、ICOMOS World Heritage Coordinator の Henry Cleere 氏から届いたため、福川裕一氏(千葉大)を推挙することとし、本人の承諾を得たのち、5月17日付けで回答した経緯が、委員長から報告され、了承した。

6) 木造建築研究フォーラム公開研究会(大阪、10月16-17日)に対する協力

まず伊藤延男顧問から、標記研究会開催の背景、とくに ICOMOS Wood Committee との関係について説明があり、次いで石井委員長から提案理由が述べられた。同フォーラムの役員である渡辺一正氏(建設省建築研究所)から事前連絡の上、5月18日付けで依頼状・主旨説明・プログラム案が届いており、後援団体の一つとして加わるよう求められている。審議の結果、後援を決定し、本誌やダイレクトメールを通じて会員各位に周知をはかり、積極的な参加を呼びかけることとなった。

7) 第12回 ICOMOS 総会(メキシコ)への対応

3月～6月段階の情報によれば、会員11名が総会に出席するものと予測されるが、今後なお増減の可能性があろう。石井委員長から、このような報告に続いて、総会における重要議事の一つである本部役員改選選挙に関する規約が説明された。次いで、投票権の配分と委任状の準備について審議し、以下の通り決定した。

(1)総会出席者の全員が投票権を持つこととする。(2)出席者が18名に達しない場合、必要数の委任状は、拡大理事会メンバーが作成し署名する。(3)委任状による代理投票は、伊藤顧問、西村本部執行委員、石井委員長が行う。(4)以上を前提として、次回拡大理事会(9月11日)の席上で投票権者名簿を作成し、ただちに本部事務局(パリ)へ提出する。

8) INFORMATION 誌第4期第7号の発行計画

山田理事より、8月初旬発行を目標として、委員長とともに準備を進めつつある実情が報告され、これを了承した。

[協議事項]

1) Guardians Fund の拠出

Roland SILVA 会長がかねて提唱している標記の「後見基金」をめぐる再度、協議した。発展途上のなかには、貴重な文化遺産を抱え、また有能な専門家を擁しながらも、経済的制約からイコモス国内委員会がまだ設立されていない国も多い。そのため先進国の国内委員会が、その会計から資金援助を行うよう要請されている。日本イコモス国内委員会としては、すでに10カ国以上がこれに賛同している事実にかんがみ、基金1口(個人会費20US\$×5名×5年分)500US\$の拠出を予定し、実行の時期については別途審議することとした。

2) Delhi Recommendation 改訂準備会議への委員派遣

Senake BANDARANAYAKE 氏(Archaeological Heritage Management 国際専門委代表、駐仏スリランカ大使)から坪井清足氏あてに、4月23日付けで、標記準備会議のメンバーに加わってほしい旨の要請状が届いている。また石井委員長あてに、5月21日付けで、坪井氏が参加できないのであれば別の適任者を推薦してほしい旨の書簡が送られてきた。Delhi Recommendation とは、UNESCO Recommendation on International Principles Applicable to Archaeological Excavations(1956年、Delhiで採択)をいう。委員長から以上のことが披露された後、本件は坪井氏の意向に沿うよう措置したい旨が述べられ、これを了承した。

(文責 宗田好史・石井 昭)

＜研究会報告＞

近・現代建築の保存について考える

その2 — モダニズムと保存

事業担当理事：田原幸夫

はじめに：

「近・現代建築の保存について考える」と題して昨年よりスタートした研究会の第2回目である。前回は「官」「民」「学」を代表して、3名の講師の方々に近・現代建築の保存全般に渡り、それぞれの立場から自由にお話をしていただいた。（JAPAN ICOMOS INFORMATION 第4号参照）第1回目としてはあまりテーマを絞らずに、近・現代建築の「保存」に関わる状況を皆で確認しておく必要があるだろうと考えたからであった。

今回第2回目にあたっては、テーマを「モダニズムと保存」とさせていただいた。これはおりしも DOCOMOMO（注）ワーキンググループが建築学会を中心に活動をスタートしたこともあり、DOCOMOMO と密接な関係を保つべき ICOMOS としても、「モダニズム」を中心としたテーマを一度設定してみる必要があるだろうと考えたからである。

プログラム：

- | | | |
|------------|---------------------|--------|
| 1) 挨拶 | 日本イコモス国内委員会委員長 | 石井 昭 氏 |
| 2) 講演 | *モダニズムの保存における理念と課題 | 三宅理一氏 |
| | *モダニズムの都市・ブラジリアを考える | 南條洋雄氏 |
| 3) 質疑・意見交換 | | |

講演の概要：

先ずはじめに日本イコモス国内委員会委員長の石井昭氏より、ICOMOS についての紹介と DOCOMOMO に関する概要説明が行われた。石井氏は、ICOMOS と DOCOMOMO は“姉妹”のような関係であり、今後とも文化遺産に関する活動を協力して行ってゆく必要があること、また DOCOMOMO の“DO”は Documentation であることに注目すべきこと、などを今回のテーマの一つである「世界遺産としてのブラジリア」の特殊性も絡めながらお話下さった。

さて今回の講師については、日本イコモス国内委員会のメンバーの中から三宅理一氏と南條洋雄氏にお願いすることになったが、当初のイメージは、三宅氏にフランスにおけるモダニズム建築の現状について、南條氏にブラジリアの“都市”としての現実についてお話いただけたら、というようなものであった。しかし三宅氏御本人より、日本の既成市街地を対象とした最近の研究成果をお話したいとの御提案があり、もとより日本における現実を離れた「保存論」は何の力にもなり得ないと感じていたこともあって、当日のような演題とさせていただいた。

三宅理一氏（芝浦工業大学教授・工博）は、先ず海外における 50 年代の建築の現状につき、いくつかの名建築を例に挙げてスライドを用いながら講演された。北欧においては歴史的な建築が少ないという状況が近代建築を大切にすることを育てているのでは、という視点から、デンマークやフィンランドのすでに“遺産”となりつつあるいくつかの近代建築につき紹介された。一方日本においてはものすごいスピードで戦後の建築が消滅している現状を横浜を例として示され、建築の寿命が欧米の 1/4～1/5 でしかないこと、防災以外に明快なメカニズムが見当たらないことを指摘された。そして防災と耐震という視点から、LCC を軸とした“経済モデル”を作成した経緯が説明された。

南條洋雄氏（建築家・JIA 理事）は、かつてブラジルで長年活躍された経験をお持ちの建築家であり、日本イコモス国内委員会には今年はじめて加わっていただいたが、以前より JIA（日本建築家協会）では保存問題委員会の中心メンバーとして熱心に活動されていた方である。我が国においてはブラジルに関する貴重な専門家の一人であると共に、とくにブラジリアについては毎年現地を訪れ、この類いまれなモダニズムの都市を、建築家としての愛情を持って見つめてこられた方でもある。世界遺産としてのブラジリアについては、本号に南條氏自身原稿を寄せられるとお聞きしており、説明は省略させていただくが、当日の講演は、正確な情報の少ないブラジリアの素顔を、たくさんのスライドによって紹介する実に興味深いものであったことをご報告しておきたい。

意見交換：

先ず、東京大学の鈴木博之氏より、LCC のようなコスト分析が現実の「保存」の力になりうるのかとの問題提起がなされた。歴史的なものを維持していくために経済的な負担増は当然であり、それを誰が負担するかという視点から、“容積ボーナス”などの都市政策の重要性が指摘された。そして“経済モデル”が逆に建て替えの根拠に使われる危険性にも言及された。JIA 保存問題委員会の篠田義男氏からも、むしろ“経済”を超えた多様な価値を皆が共有できるような方向にもって行く努力が大切、との意見が出され、近・現代建築の置かれた経済社会の中での難しい局面が当然のことながら大きな論点となったのである。

法政大学の崔康勲氏からは、学舎取り壊しに際しての大江宏氏との対話や学内での反応を例として、はたして日本においてモダニズムは成立しているのか、との発言があり、また日本福祉大学の片方信也氏からはブラジリアにおけるモータリゼーションの考え方についての質問も出されたが、紙面の関係から割愛せざるを得ないことをご了解いただきたい。

最後に来年に予定されている「DOCOMOMO 展」につき、実行委員長の鈴木博之氏が概要紹介をされ、また同氏より、東京都立大学の中原まり氏による ICAM（International Confederation of Architectural Museum）の紹介に関連して、我が国の「建築博物館」構想に及ぶ話題も提供されたが、時間的制約により十分な意見交換ができなかったのは残念であった。今後のこのシリーズにおける企画の参考にさせていただくことでお許しをいただきたい。

準備・運営にご協力いただいた方々に改めてお礼申し上げるとともに、今後の更なるご助力をお願いして研究会報告を終わりたい。

1999. 06. 05 JIA 館 参加者：45名（内 ICOMOS 会員 11名）

（注） DOCOMOMO : The Documentation and Conservation of buildings, sites and neighbourhoods of the Modern Movement の略

1989年に設立された近代主義建築運動に関する国際的な情報収集活動組織。現在本部はオランダのデルフト工科大学に置かれている。

日本においては昨年、建築学会の建築歴史・意匠委員会のなかに「DOCOMOMO 対応ワーキンググループ」が設置され、日本支部設立に向けての活動がスタートしている。

世界遺産としてのブラジリア

南條洋雄

1987年ブラジリアが世界文化遺産に登録された。ブラジルの首都がリオデジャネイロから建設されたばかりのブラジリアに正式に移転したのが1960年4月21日、それからわずか27年という最も若い世界遺産の出現である。

ブラジリア登録の選定理由は文化遺産六つの登録基準のうち(i)人間の創造的才能を表す傑作であること、と(iv)人類の歴史の重要な段階を物語る建築様式、あるいは建築的又は技術的な集合体、あるいは景観に関するすぐれた見本であること、という二つの基準に適合していると評価されたからである。

世界文化遺産ブラジリアの登録は、この若さ＝新しさという点と、広大な面積に及ぶ近代的都市景観が対象であるという二つの点で、それまでの世界遺産登録の概念を大きく変える意味深いものであったと言える。

1. ブラジルという国

スペイン人によって征服された南米大陸にあって、ブラジルはアメリカ大陸で唯一ポルトガル語が公用語の国である。精悍なスペイン人とは正反対で穏和なポルトガル人によって創られたブラジルの都市は、大陸の熱帯気候にも恵まれるのんびりとした落ち着きのあるラテン情緒のまちが多い。

植民地時代は天然ゴム、胡椒、砂糖、綿花、金銀、コーヒーといった、ヨーロッパに持ち帰る資源を求めて、各産地や港に次々と都市が創られた。大統領府が置かれたバイア州サルバドール、金銀ダイヤモンドで栄華を極めたミナス州オウロ・プレットやコンゴニャス、一時オランダに占領されたベルナンブーコ州オリнда、フランスの影響を受けたマラニョン州サンルイス、これらの古都市はいずれも世界文化遺産に登録されている。



サルバドール



オウロ・プレット

一般的にブラジル人とはポルトガル人、現地の土着民、アフリカの黒人の三者が複雑に混じり合った人種と言えるが、その後はイタリア、ドイツ、オランダ等ヨーロッパ全体、アラブからアジアに至る世界中の国々からの移民を受け入れてきたため、文字通り人種の

増埒となっているが、文化面でも各民族が自国の文化を持ち込んでいるので、独特の混合文化がみられる。日本からも百年以上前から移民が海を渡り、現在ではサンパウロ州を中心に百万人を越える日系人が生活している。

2. ブラジリア建設の歴史

新首都ブラジリア建設の歴史は古く 18 世紀にまでさかのぼることができる。そもそもブラジルの発見は 1500 年、その後サルバドールにポルトガルの大総統府が置かれ、大西洋沿岸の諸都市を拠点に奥地開発が進んだが、この頃より主として国防上の理由から内陸部に拠点都市を建設するという目標が国民の間に浸透していった。

1822 年帝政国家として独立し、リオデジャネイロがブラジルの首都となるが、翌年には帝国憲法制定会議に「ブラジルに新首都を建設する必要性と方法に関する覚書」が提出され、沿岸部に偏っていた国土開発からの脱皮と広大な内陸部の開発による国家の発展を期して、ブラジル中央高原を具体的な候補地と定め、その名称「ブラジリア」までもが提言されていた。

その後共和制に移行（1889）、首都移転実現に向けて議会を中心に様々な試みがなされるが遅々として進まず、ようやく 1956 年クビチェック大統領により首都移転実施に関する法案が決議された。

ただちに新首都建設パイロット・プランの為のコンペが実施され、翌 57 年ルシオ・コスタ案採用を決定し、一気に建設が進められた。数々の逸話を残す事になる突貫工事の末、1960 年 4 月 21 日予定通り首都移転が決行されたのである。

3. ブラジリア連邦区とプレーノ・ピロット地区

ブラジルは南米大陸のほぼ半分、日本の約 22.5 倍という広大な国土をもち、23 州 3 直轄地と 1 連邦区の行政区に分かれているが、ブラジリアはどの州からも独立した連邦政府直轄の特別区の名前であり、通常ブラジリア DF (Distrito Federal) と呼ばれ、ブラジリア区を含む 19 の行政区 (96 年現在) に分かれている。

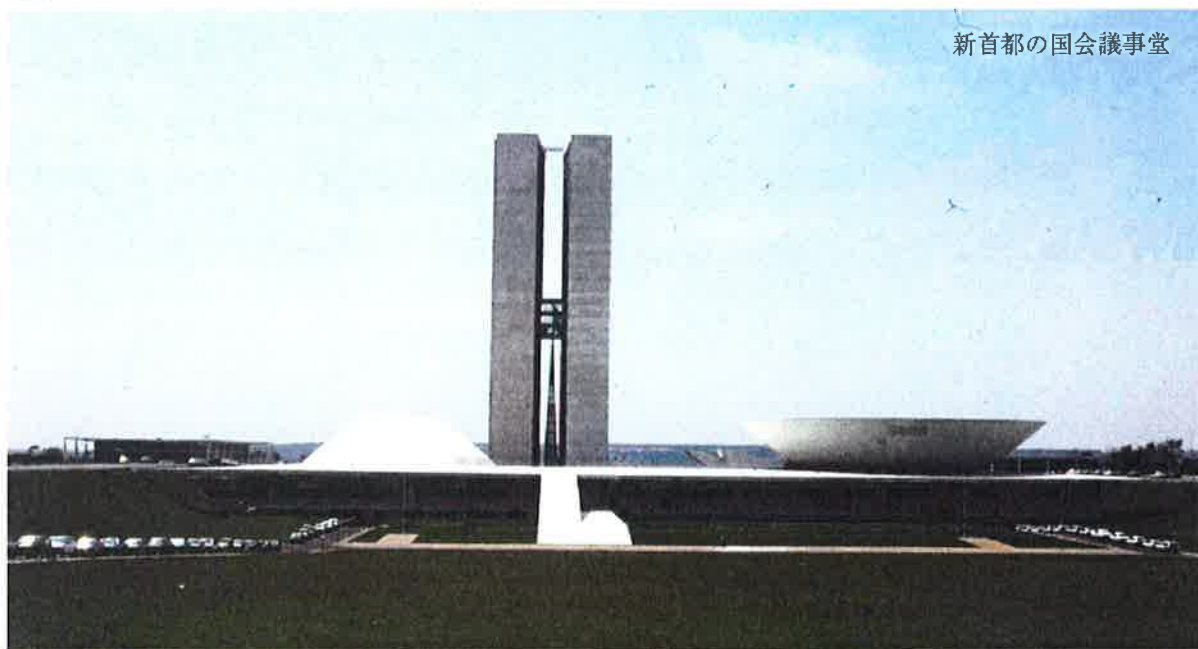
首都建設にあたっては、建設労働者の居住地として先行建設されたバンデイランテ、タグアチンガをはじめ、首都移転後もソブラデーニョ、ガマ、グアラなど多くの計画都市が建設され、それらがプレーノ・ピロットと呼ばれる首都機能拠点部を中心に衛生都市群を形成している。

飛行機型プランで知られるルシオ・コスタのコンペ当選案は、この首都中枢部であるプレーノ・ピロットのマスタープランであり、コスタが師と仰ぐル・コルビジェの未来都市のイメージにきわめて忠実な内容である。

人工湖であるパラノア湖に向かってなだらかに広がる大地に、高速道路の十字の軸をしるし、湖と並行軸には住宅地区を、直行軸には首都機能官庁施設を、それらの交点には商業業務施設を配した明快なプランは、自動車交通時代に向けた当時の都市計画理論を先取りしたものであり、20 世紀型都市モデルの象徴であったといえよう。

ブラジルという発展途上国が世界に発信した新首都、近代都市ブラジリアは、こうして世界中をあっといわせ、そしてまた様々な洗礼を受ける事になるのであった。

4. ブラジリア保全への取組



世界文化遺産登録に並行して、ブラジル政府は1987年政令第10829号により、ルシオ・コスタによるプレーノ・ピロット地区のほぼ全域を保全地区に指定し、ユネスコに対してまた世界に対してこの地区を世界文化遺産として永久に保護保全することを意志表明した。

さらに1990年文化省令第4号により同地区を連邦の文化財として指定し、保全方策を具体化した。その後複数の省庁にまたがる法制化が進められているが、現在では同地区を大きく4つのゾーンに分類しそれぞれの都市空間および景観構成上の意義付けを示し、さらに各ゾーンは細分化され各々についてより詳しい保全プランが示されており、その骨子は以下のような内容を含むものである。

- ・ 十字に交差する二つの都市軸によって秩序づけられた都市構造の保全
- ・ ハイウェイ軸とモニュメント軸を基本とした道路交通システムの保全
- ・ オスカー・ニーマイヤー他の設計によるシンボリックな建築群の保全
- ・ 近隣住区理論によるスーパーストリック居住区の保全
- ・ パラノア湖の水位の保全と湖畔の改変の禁止
- ・ その他公園緑地などリクリエーションゾーンの保全

5. 世界文化遺産ブラジリアの意義

ブラジリアが完成すると世界中の都市研究者や評論家がブラジリアに殺到したが、この都市の当時の風景はけっして好印象を与えなかったようだ。大平原の真ん中に突如出現した人工的なこのまちでは、建設途中の建物が疎らで、赤土の大地に大きな道路ばかりが目立つ、木も余りない殺風景なまちであったようだ。こうして世界中に「非人間的な街」、「世紀の失敗作」といった報道が駆けめぐった。

近年日本でも東京の首都機能移転が検討されていることから、久しぶりにブラジリアが注目されているが、当時の報道のままブラジリアを理解している人が多い。ところが40才になったブラジリアを今訪れると、この街の実態に驚かされる。

プラーノ・ピロット地区はコスタの計画案の全容が漸く完成した。人口も計画通り約30万人に達し、ル・コルビジェの都市理論の多くがその真価を發揮し始めている。植樹を続けた結果、街中に緑があふれ、ブラジリア生まれの二世、三世も増えて、活気のある街に変貌した。

スラム問題、都市犯罪、交通渋滞、環境汚染など深刻な都市問題に苦しむ南米の大都市を尻目に、南米屈指の治安と社会福祉、恵まれた住宅地環境、高い所得水準と教育水準を達成し、ブラジルで最も人気のある都市に成長した。

計画的に整備された都市インフラはいかなる都市にも見られぬ完璧さであり、ラテンアメリカで唯一スラムが無い町、ブラジルでも群を抜いて豊かで教育水準も高く、治安も全く問題ない都市という客観的データは注目に値する。非人間的で住み難い町と言われるが、近隣住区理論で構成された住宅地区のあふれる緑とクルドサックやハンプによる歩車道の完全分離などは見事に機能している。



住宅地の現況

土地利用ゾーニングの硬直さや商業施設配置の矛盾など多くの問題も浮上してきているが、新しい都市計画行政により漸次修正されている。衛生都市群との間には地下鉄も開通し、いまや人口三百万人の自立都市としてブラジリア（連邦区）は立派に定着している。

バッシングの矢面に立たされ寡黙であったこのプランの提案者であるルシオ・コスタ（1998年没）は穏やかに語ってくれた。「この街で生まれた人々がこの街を育てていく。私はこの街が成長する為のシステムという命を与えただけである。批判に応える必要はない。この街の現実が答えてくれているから」と。



ルシオ・コスタ・スペースの模型

新首都ブラジリアの世界文化遺産登録は、未来にかけるブラジル人を勇気づける特別な意味を持つものであった。世界文化遺産登録を記念して、三権広場の地下にルシオ・コスタ・スペース (ESPAÇO LUCIO COSTA) という部屋が建設された。コンペ時の設計図書と共に、保全指定を受けたプラーノ・ピロット地区の全容が、精巧な模型によって展示されている。

カルチュラル・イチネラリー国際委員会 国際会議（CIIC）報告

杉尾 邦江

<会議テーマ>「五大陸に於けるスペイン、ポルトガルの稜堡・城塞及びカルチュラル・イチネラリーに於ける方法論・定義及び運用について」

表記の国際会議が1999年5月18日より22日までスペインIbiza（イビザ）島に於いて開催された。日本より本国際委員会メンバーの杉尾邦江が参加しましたので報告致します。

1. 会議の概要

本会議は、前半3日間は「五大陸に於けるカルチュラル・イチネラリーとしてのスペインポルトルの稜堡・城塞」、後半2日間は「カルチュラル・イチネラリーに於ける方法論、定義及び運用」をテーマに行われた。

参加国は56ヶ国92名の参加があり、スピーカーは前半テーマ30名、後半テーマ32名の大勢のスピーカーによる多彩なプレゼンテーションが行われ、会議の最終日にそれぞれのテーマに関する最終宣言が報告された。

ドラフトは1999年7月12日に文書としてまとめられ、杉尾宛、本委員会の委員長、Maria Rosa Suarez-Inclan Ducassi女史より送付されてきた。

会議は盛会で、特にスピーカーは自国スペイン国間の格安航空券と滞在ホテル代が提供される等、会議主催のスペイン・イコモスの本会議にかける意気込みが強く感じられた。参加国も旧スペイン系の国、中南米より17ヶ国の参加が目立った。その他スペイン、ポルトガル、イタリア等の地中海沿岸諸国10ヶ国、アフリカ6ヶ国、東欧諸国5ヶ国、アジア・オセアニア6ヶ国、その他、フランス、アメリカ、カナダの参加が見られた。

会議場はイビザ島内のCam Ventosa Centro Cultural、宿舎は全員Fiesta Palm Beach Hotelに滞在し、居住を共にしたことにより参加者のコミュニケーションが大いにはかられ親交が深まった。会議は前半は、「五大陸に於けるスペイン、ポルトガルの稜堡・城塞」をテーマに30名のプレゼンテーションが3日間に亘って行われた。

ヨーロッパ、中南米、アフリカ、アジア各地のそれぞれの国に残存しているスペイン、ポルトガルが建設した城塞、稜堡について、それぞれの特徴と保存と歴史、現状等が報告された。

第2章「カルチュラル・イチネラリーに於ける方法・定義及び運用」では、カルチュラル・イチネラリーの概念が明確に認識されていない段階にあるため、かなり認識の異なったプレゼンテーションがなされたが、最終日は本題のカルチュラル・イチネラリーにおける方法・定義・運用をテーマにした報告がイタリー、アフリカ象牙海岸、日本、アルゼンチンの4ヶ国代表によってなされた。

2. カルチュラル・イチネラリー国際委員会（CIIC）会議

最終日5月22日、10:00～11:00まで、大会会議場に於いて国際委員会の会議が開催された。主として今後の国際委員会の運営について及び委員会メンバーの補充として新メンバーの参加を募ったところ、アジア地区にオーストラリアの参加希望が出されたのでこれまでのアジア地区がアジア・オセアニア地区となりそうである。その他数カ国から参加の希望があった。